

## 大旅行家イブン・バットゥータ モロッコ

事の始まりは日本モロッコ協会の理事会が終り、昼食をとりながら話題がコロナと海外旅行に及んだときである。広瀬晴子会長（元モロッコ王国特命全権大使）から、モロッコには14世紀に世界を旅したイブン・バットゥータという大旅行家がいる、その旅行記は大変興味深いけど読みますか？といわれ思わず「ぜひ拝見したい」と手を挙げた。

イブン・バットゥータは敬虔なイスラム教徒で、14世紀にアフリカ・アラビア・ペルシャ・インドさらに中国など三大陸50か国、12万km（地球を3周）を30年間かけて駆け巡ったモロッコ人の大旅行家である。イブン・バットゥータはモロッコから距離的に近いヨーロッパのキリスト教地域には足を踏み入れてないが、イスラム教のエリアはほとんど踏破している。

彼を突き動かしたイスラム教とは何か、イブン・バットゥータの歩いた軌跡に触れる前にイスラム教の基本を覗いてみたい。



アブダビの豪華なシェークザイドモスク

イスラム教は三大宗教の一つで、2010年のデータによると、世界に占める信者の数は16億人である。因みにキリスト教徒は21,7億人、仏教徒は4億人といわれている。

イスラム教の聖地メッカには、アラビア人の信仰の中心であるカバー神殿があり、祭祀を取り仕切っていたのはクライシュ族であった。570年ごろメッカにクライシュ族であるマホメッドが誕生した。マホメッドは偶像崇拜を嫌い、また豪商たちが莫大な利益を上げている一方、一般民衆は貧しい生活をしているのを見て救済しなければならぬと使命感を抱いた。

マホメッドが40歳に達したころに、唯一神アッラーの啓示を受け、自身は神が遣わした預言者だと称しイスラム教を興した。当然メッカの既得権益者の豪商や富商、偶像崇拜者等から大いなる反感をかかった。

622年、マホメッドは400km離れたメディーナに移った。このことをイスラム教ではヒジュラ（聖遷）と言いイスラム教の紀元元年とした。

マホメッドの唱えるイスラム教は大いに広まり、マホメッドは宗教・政治・軍事の指導者として、メッカの敵たちを駆逐し、カバー神殿の偶像を全て取り除きイスラム教の聖地とした。

マホメッドが632年に没した後、マホメッドの説いた教えはコーランとしてまとめられ651年に完成した。コーランはイスラム教信者の信仰と日常生活の規範となり行為の絶対的な基本となっている。コーランはアラビア語でかかっている。

コーランに書かれている内容は全て唯一の神アッラーから天使ガブリエルを通し、マホメッドに啓示されたもので、そのすべてが真理であるとされ、イスラム教はアッラーのほかに神は無く、マホメッドは神の使徒と位置付けられている。創始者マホメッドは後継者を指名しないまま没した。

イスラム教は後継者の選び方により、シーア派とスンニ派に二分される。イスラム教徒の10%が

シーア派でありマホメッドの血を引く子孫を後継者と定め、スンニ派はイスラム教徒の90%を占め能力に優れた人を選んでいる。

ところで迂闊ながらモロッコ協会に関係しながら、歴史上の人物であるモロッコ人のイブン・バットゥータについてはまったく知らずにいた。モロッコ人で知っている人物を挙げよといわれれば歴代国王と、この20数年間の駐日大使と大使館員、それとオリンピックの金メダリストぐらいしか思い浮かばない。思い起こせばイブン・バットゥータという名前の響きにはかすかに覚えがあるのは、同人に因んだのかどうか定かでないが、先年訪れたドバイにある世界一のショッピングモールの中にイブン・バットゥータというエリアがあったことを思い出した。

イブン・バットゥータは高校の世界史の教科書にも掲載のある人物である。これまで知らなかったことは不勉強の誹りを免れない。

14世紀といえば、航空機も高速の列車も車もなく、船も人力か風まかせで、移動の手段が現代と比べ著しく劣っていた時代である。この時代に50カ国12万kmも旅を続けたことは驚きである。

イブン・バットゥータが当時どんな体験をしたのか、旅を続ける意志を支え続け、彼をここまで突き動かしてきたものは一体何か非常な興味を抱き、その足跡をたどってみたいと思い参考にした出版物は400頁にも及ぶ（イブン・バットゥータと境域への旅、「大旅行記」めぐる新研究・家島彦一著 名古屋大学出版会）である。

イブン・バットゥータは（1304年～1368年）マリーン朝時代、モロッコのタンジェに生まれた。家系は代々イスラム法学者の家系であり22歳の時、タンジェを出発し陸路エジプト、シリアを経てメッカに巡礼し3年間滞在勉強する。



タンジェの街



タンジェの路地

聖地メッカ巡礼を果たした後、西アジア・東アフリカ・小アジア・バルカン半島・南ロシア・中央アジア・インド・東南アジア・中国・イベリア半島・さらにサハラ砂漠を横断しニジェール・スーダンを訪れるなど生涯12万kmを踏破した。



サハラ砂漠の入口メルズーガ



ラクダに揺られて



果てしない砂の連なり

当時の世情を考えるとリスクに溢れた旅であったに違いないが、にもかかわらず30年間も続けた。旅の目的はまずメッカ巡礼である。加えて旅好きで、自ら見聞し、各地の王や高名な学者や知識人、さらには聖人に会いイスラムの勉強すること、聖地を尋ねまた各地の都市の状況をつぶさに見るなど諸々が彼を突き動かす原動力になっているように感じられる。



迷路のようなフェズの旧市街

新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈物」である。こうして彼の足跡である旅行記は1355年に完成した。アラビア語で記された紀行文がヨーロッパに知られるようになったのは17世紀、18世紀になってからで、各国語に翻訳された。

イスラム教社会では聖地巡礼は信者の義務であり、14世紀当時はこのためのいわば旅行案内（リフレという）が出回っていた。大旅行記の一部にはその引用と思われる箇所もあるといわれている。彼は世界を転々として旅をしながら、イスラムの法官職を名乗り、人々の尊敬を集めていたが、インドのデリーには1334年～1342年にわたる8年間という長年月滞在した。インドの王に乞われて当時元朝であった中国へ挨拶に向かうも、船が難破して使命は中断してしまうが苦難を乗り切り、船で現在の中国の福建省にたどり着いている。

中国では紙幣の便利さに驚き、絹織物や陶磁器にも高い関心を示し記録に残している。さらに市場でも覗いたのであろうか。食材に犬やカエル、イスラム圏では忌避されている豚などが食材として並んでいることをも記している。中国国内では泉州・広州・福州・杭州・北京を訪ね万里の長城についても触れている。

旅の途中自分の父親が15年前に亡くなったことを知り、モロッコに帰宅してから母親も先ごろ亡くなったことを知る。そして遅まきながらモロッコ国内をも訪ね歩いている。かつての首都マラケッシュに立ち寄ったが黒死病（＝ペスト）とフェズへ首都が移ったため寂れ切っていたと記録は伝えている。

タンジェには彼の墓があるし、モロッコにはイブン・バットゥータの名を冠した学校もあるそうだ。ところで、いずれの資料を見てもイブン・バットゥータの肩書は旅行家とあるが、彼の足跡をたどると旅行家というより大冒険家のイメージが強い。同時代のマルコポーロの行動や足跡をたどってみても大冒険家といった方がしっくりするし、唐の時代に教義を求めて天竺まで行った中国僧玄奘

さらに彼の驚くべき能力は、旅の途中で異教徒や山賊、海賊、船の難破などでメモや記録を全て失いながら記憶を頼りに体験談を口述し記録に残したことで判る通り記憶力の素晴らしさである。

当時のモロッコの首都であったフェズのスルタン（モロッコ王）はイブン・バットゥータの大旅行で出会った数々に興味を抱き、その体験談を口述させ、文学者であるイブン・ジュザイーに筆記させ、これを回想記にまとめた。正式名称は「諸都市の

三蔵も不屈の頑張りを見せているがいずれも大冒険家の肩書が似合うように感じるのである。